

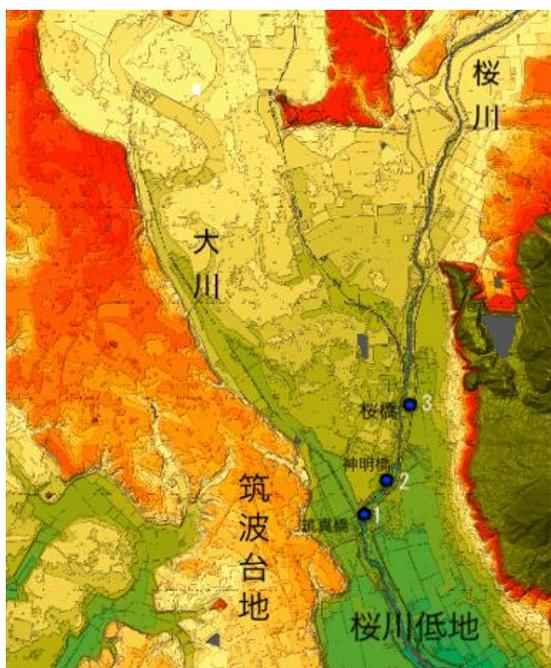
つくば市上大島から筑西市酒寄にかけての桜川河岸において、鬼怒川の河川争奪前後の幾つかの露頭を見だし、記載を行った。上大島の筑真橋においては泥炭層からなる下大島層と土浦礫層を見だし、上大島の神明橋では、ローム層に覆われるチャンネルのある土浦礫層、酒寄の桜橋ではローム層に覆われる淘汰の良い砂層と、3箇所異なる層相の堆積物を見出した。

これは古鬼怒川が桜川筋に流れ込んでいた時代には、鬼怒川は扇状地をなし、また桜川を堰き止めた湖沼があった。河川争奪後には、河道跡の三日月湖や後背低地の湿地があり、広い河原には砂が飛ばされて河畔砂丘が形成されていた。

また上大島の筑真橋において、泥炭層・シルト層からなる下大島層中に、数多くのテフラ層が挟在していた。鈴木ほか (1993) のSK1 からSK3 テフラで、SK1 はバブル型火山ガラスを多量に含むATである。また鬼怒川系の礫層からなる土浦礫層の上位のシルト層には、3枚の未記載テフラ、Ti-1 からTi-3 が見出された。

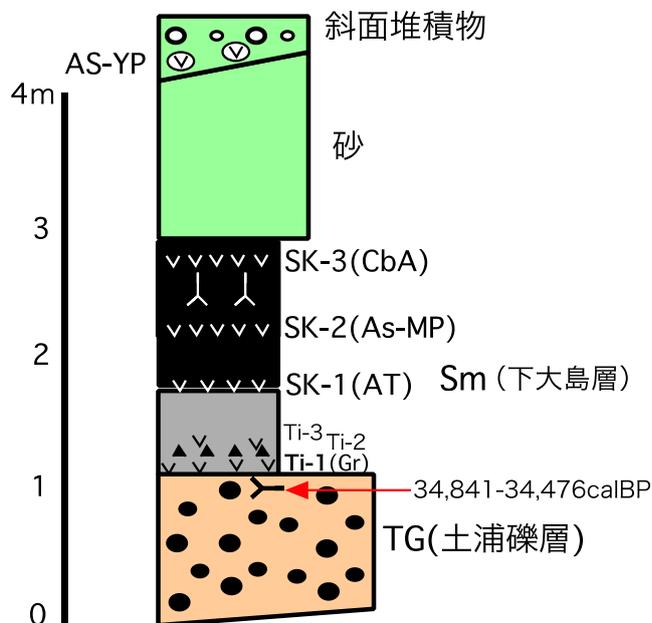
筑真橋の桜川河岸において、土浦礫層最上部に挟在している材について、AMS法による¹⁴C年代測定を行った。また土浦礫層を覆うシルト層最下部のテフラTi-1について火山ガラスの主成分分析や、火山ガラス・角閃石の屈折率測定を行った。

その結果、土浦礫層最上部の材の年代は歴年の¹⁴C年代が34,841-34,476calBP(1σ)を示した。この年代は古鬼怒川の離水層準直前を示し、河道遷移の年代に近いと思われる。また土浦礫層直上のTi-1テフラの対比については、検討途中である。



標高段彩図と露頭位置図

1. 筑真橋上流左岸 1



筑真橋柱状図

キーワード：桜川低地、古里川低地、立川期、最終氷期